

藤井義久先輩を悼む

皆島博(福井大学)

藤井義久先輩は、去る平成11(1999)年6月に心臓疾患により急逝されました。奇しくも同月、お亡くなりになる1週間ほど前、東京都立大学で開催された日本言語学会大会の受付に立っておられたのを見たのが、藤井先輩のご生前の姿を拝見した最後となってしまいました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

藤井先輩は、大阪外国語大学アラビア語学科をご卒業後、昭和62(1987)年、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科一般言語学専攻に入学されました。私事にわたり恐縮ですが、当時、私は第1学群人文学類の4年生で一般言語学の専門科目の『音声学』の講義を取っておりました。偶然、藤井先輩も同じ授業に出ておられ、これが私と藤井先輩との最初の出会いということになります。アラビア語学科出身だからということでしょうか、「子音論」の時、先生の「咽頭音」をデモンストレーションするように、との求めに応じて「ハァ〜ッ」と声を絞るように発声しておられたお姿が何故か鮮明に印象に残っております。

藤井先輩は、不肖の後輩の私が及ぶべくもなく、博識にして大変な勉強家でいらっしゃいました。英語学(特に、生成文法理論)や日本語学にも造詣が深く、一般言語学だけでなく英語学や日本語学の授業や研究会などにも顔を出しておられ、他専攻の院生とも幅広い交流があったと記憶しております。

藤井先輩は、平成2(1990)年、松本克己教授のご指導のもと「アラビア語における一致現象について」という論文で修士号を取得され、さらに研究を深めるべく神戸大学大学院へと転学されることになりました。その時、藤井先輩の荷造りのお手伝いをさせていただきましたが、読書家の藤井先輩は、専門・専門外を問わずかなりの量の蔵書をお持ちで、そのうちの何冊かをお礼という形で譲っていただきました。その中の一冊『英語の論理・日本語の論理』(安藤貞雄、大修館書店、1986年)は、勉強家の藤井先輩の本らしく、たくさん書き込みやアンダーラインが引かれておりました。私の現在の勤務校での授業のテキストとしても使用しましたが、

それがこんなにも早く藤井先輩の「形見」になろうとは夢にも思いませんでした。

神戸大学大学院にお移りになってからは、博士論文を執筆すべく、柴谷方良教授のご指導のもと研究に励まれ、平成9(1997)年4月には、神戸大学文学部専任講師にご就任、博士論文の早期完成を目指しておられたようです。神戸大学に着任されてからは、教育や研究はもとより、日本言語学会会長でもあられた柴谷先生のもと学会事務局の仕事なども手伝っておられ激務の毎日だったようです。ご心労に加えて、お酒や煙草がとても好きでいらしたので、知らず知らずのうちに健康を害されてしまったのでしょうか... 今となっては知るよしもありますが、藤井先輩と同じ筑波大学一般言語学研究室で学んだ者たちが良い研究を続けて行くことこそが言語研究者として志半ばにして早世された藤井先輩への何よりの供養になると思われてなりません。藤井先輩のご冥福を心よりお祈り申し上げる次第です。